

## ラフカディオ・ハーンのこと

『怪談』の著者ラフカディオ・ハーンは、1850年イギリス占領下のギリシャに生まれ、父の母国アイランドで育ち、アメリカでジャーナリストとして名を売ります。来日は1890年（明治23年）39歳の時。翌年小泉セツと結婚、後に日本に帰化し、小泉八雲と名乗ります。

ハーンは1892年（明治25年）4月3日、太宰府を訪れます。熊本第五高等学校赴任の翌年に春休みを利用して博多を旅行、少し足を伸ばした先が太宰府でした。当時、太宰府は九百九十年忌大祭の最中<sup>まなか</sup>。ほんの一時間の滞在のうち、ハーンは、林立する石灯籠、黒光りする青銅の像、梅林、春陽を浴びてピカピカ光る土産物の玩具、祠の列、本殿のそり立つ大屋根に圧倒されます。大群衆のざわめきの中境内に立ち彼は、参拝の何百という柏手<sup>かしわで</sup>の響きを聞いたのでした（島根・九州だより）。

故郷太宰府をこよなく愛した哲学者・井上哲次郎（1855―1944）は、東京帝国大学在任中に実はハーンと「不運な」出会いをしています。ハーンは1896年（明治29年）から東大で英文学の講座を担当しますが、1903年（明治36年）3月、井上<sup>が</sup>

### 太宰府人物志

資料室だより ⑦

文科大学長の時に「解雇」されてしまうのです。学生の留任運動と井上の苦慮の結果、大学側はハーンの講義時間を減らすことで結着を試みますが、双方のこじれた関係は戻らず、ハーンは東大を去ります。

ハーン研究では、「解雇」の原因として①高額な俸給、②長期有給休暇の申請、③日本の文教政策の転換、を挙げています。当時ハーンは帰化していますので、雇用条件は日本人と同じ。また彼は「講師」なので長期休暇取得の資格もありません。ところが給料はお雇い外国人待遇で、講師の身でありながら東大総長と同額。高給取りの外国人教師から、日本人教師へと雇い替えを目論<sup>もくろみ</sup>んでいた当局にとって、ハーンの解雇は必然であったと言えます（東大は後に、ハーン一人分の給料で夏目漱石ら3人を雇用）。

このハーン「解雇」事件は、井上にとつてよほど心にわだかまるものであったでしょう。彼は後年「小泉八雲氏と旧日本」<sup>を著し</sup>、ハーンとの関係を詳しく語る中で、解雇の一件について弁明を行っています（『懐旧録』、春秋社松柏館、1943年）。